

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13216

研究課題名（和文）主題理論における機能投射の必要性の研究

研究課題名（英文）A Study of the Necessity of Functional Projection in Thematic Theory

研究代表者

梶本 顕士（Sugimoto, Kenji）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90712274

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、(i)状態変化動詞と心理動詞といった使役起動交替を示す動詞、(ii)非特定の目的語交替を示す動詞、(iii)使役・経験の意味を持つ動詞have、(iv)非対格と非能格の両用法を持つ移動様態動詞を研究対象とし、主題役割に対するconstructivist approachの下、これらの動詞類の動詞句構造を調査した。これら4つの動詞類の項交替形間の動詞句省略、擬似空所化のデータに基づき、それらの動詞句構造を提案し、どのような種類の軽動詞が必要であるのかを明らかにした。また省略に課せられる統語的同一性は、先行詞と削除部の動詞句構造が包含関係を形成する場合にも満たされることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の第1の学術的意義は、主題役割に対するアプローチとして、constructivist approachの立場を支持したことである。また第2の学術的意義は、省略に課せられる同一性条件には、Merchant (2013)で提案される統語構造上の同一性条件が必要であることを支持したことである。最後に社会的意義として、本研究での成果は、英語教育における動詞の文型の指導や省略表現の指導に役立つ可能性があることを示唆している。

研究成果の概要（英文）：Following the constructivist view of thematic roles, we have examined syntactic structures for the following four types of verb: (i) verbs that exhibit the causative inchoative alternation, such as change of state verbs (e.g. open, move, melt,...), and causative psych verbs (e.g., worry, bother,...), (ii) verbs that exhibit the unspecified object alternation, (iii) the verb have that carries causative and experiential meanings and (iv) manner of motion verbs that can be used as both unaccusative and unergative verbs. Based on the data of applicability of the verb phrase ellipsis and pseudogapping between the alternants of the four types of verb, we have proposed verb phrase structures for them and revealed what kind of little v is necessary. We have also shown that the syntactic identity condition on ellipsis can be satisfied even when the antecedent verb phrase and the elided verb phrase form a set-subset structural relation and constitute partial identity.

研究分野：人文学

キーワード：動詞句構造 軽動詞の種類 省略 同一性条件

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

Chomsky (1995) で動詞句の上位に機能投射 (vP) があるという分析が登場して以来、動詞の項実現や交替、従来語彙情報であった項構造の情報を統語構造から、特に機能投射の相違から派生させようとする研究が行われ、その結果、様々な種類の機能投射が仮定されてきた。例えば、Folli and Harley (2005, 2006, 2008) Harley (2005, 2011) などで採用されるアプローチでは、動詞の自他交替を、異なる種類の機能投射 (軽動詞 v_{do} , v_{cause} , v_{become} 等) を仮定し、どの機能投射が併合されるかの相違から説明する。

このような動詞句構造の研究が進む一方で、動詞句削除や間接疑問縮約等の削除の研究領域では削除操作の適用には意味上の同一性条件だけではなく、統語的同一性の条件も課せられることが、Merchant (2013) 等の研究から明らかになってきた。具体的には Merchant (2013) は、態の交替は論理的意味に影響を及ぼさないにも関わらず、間接疑問縮約において先行詞との間で態の不一致が許されないことから、態の情報を言語化する機能投射 VoiceP を仮定した上で、間接疑問縮約において態の不一致が許されないのは、削除される構造内の Voice 主要部の値が異なる ($Voice_{active}$ v.s. $Voice_{passive}$) ためであり、一方で動詞句削除において態の不一致が許されるのは、Voice 主要部を含まないより小さな構造が削除の対象であり、統語的な (機能投射の) 同一性を満たすためであると説明する。

上記の動詞句研究の考え方と Merchant の分析が正しいとすると、削除に課せられる統語的同一性の条件の下、動詞の異なる交替形間の動詞句削除の可否を観察することにより、その交替形の動詞句構造どのようなものであるのか、特にどのような種類の軽動詞 (v_{do} , v_{cause} , v_{become} 等) がその交替形に関与しているのかを確かめられるのではないかと考え、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、様々な交替形間の削除の可否を調査し、今までに仮定されてきた様々な機能投射について、実在性・必要性を批判的に検討し、統合・還元する可能性を探り、主題理論と削除の認可条件に新たな分析を提案することを目的とする。

3. 研究の方法

状態変化動詞 (e.g. open, move, melt, ...) や心理動詞 (worry, bother, ...) といった使役起動交替を示す動詞、非特定の目的語交替を示す動詞 (eat, drink, write, ...)、使役・経験の意味を持つ動詞 have、非対格と非能格の両用法を持つ移動様態動詞 (float, roll, bounce, ...) を研究対象とし、ある動詞の交替形にどのような軽動詞が関与しているのかを先行研究を中心に調査した。また先行研究がない場合には、交替現象やその他の言語事実を説明するためには、どのような軽動詞を想定することができるのかを検討した。

異なる交替形間の動詞句削除の可否を調査し、3つのパターンに分類した。1つ目が、(i)異なる交替形においてどちらを先行詞にしても動詞句削除が許されない場合である。2つ目が、(ii)異なる交替形においてどちらか一方を先行詞にするときのみ動詞句削除が許される場合である。3つ目が、(iii)異なる交替形においてどちらを先行詞にしても動詞句削除が許される場合である。

新たな動詞句構造の提案と動詞句削除の認可条件の精緻化を行なった。具体的には、の調査において(i)のパターンに分類された場合、交替形間には互いに異なる機能投射が存在する可能性を検討した。(ii)のパターンに分類された場合、両交替形には同一の機能投射が関与し、かつ

異なる機能投射が関与するという一見矛盾した結論に導かれるが、これを解決する1つの可能性として、一方の交替形の構造はもう一方の交替形の構造を部分集合として含む構造である可能性を検討した。(iii)のパターンに分類される場合、これらの交替形には想定されているような機能投射の相違はない、つまり異なる機能投射を1つに統合できる可能性はないのか検討した。また1つに統合できない場合には、削除できる事実を説明するために、統語的同一性が機能投射の存在、種類に感応的であるのか、またはその中の何らかの素性のみに感応的であるのかを検討した。

4. 研究成果

上記の研究方法に基づき具体的に研究を推し進めてきた結果、次の3つが主要な研究成果として得られた。また特に本研究課題にとって直接的な研究成果については下線を引いて示した。

第1の研究成果

状態・位置変化動詞(e.g. open, move)、心理動詞(e.g. worry)、に加え、非特定の目的語交替動詞(e.g. eat)も研究対象とし、これらと比較しながら動詞句の構造を調査した。特に Grosu(1985/1987)の先行研究に基づき、異なる文法範疇(機能)を持つ動詞句内要素が等位接続されている構文 HCC(Heterofunctional Coordinate Construction)のデータを収集・観察した。その結果、(1)に示すように eat のような非特定の目的語交替動詞の場合には、先行研究の観察通り、等位接続の順序に関わらず HCC が文法的であったが、(2)と(3)で示すように move のような位置変化動詞や、worry のような使役的心理動詞の場合には、等位項間の順序に制限が見られることが新たにわかった。

- (1) a. John ate only pork yesterday and only at home today.
b. John ate only at home today and only pork yesterday.
- (2) a. Hurricanes moved only large amounts of air yesterday and only at great speeds today.
b. *Hurricanes move only at great speeds and only large amounts of air.
- (3) a. The student worries only his teacher before exams and only about his grades after the semester is over.
b. *The student worries only about his grade after the semester is over and only his teacher before exams.

つまり使役形の目的語を第一等位項にし、自動詞形に生じる前置詞句を第二等位項にする HCC は容認されるが、逆にして等位接続する HCC は容認されない。このような言語事実の背後には、動詞句省略の操作が関与し、HCC は動詞句同士の等位接続と第二等位項の省略により派生するとし、eat と worry/move の動詞句の等位接続における振る舞いの違いは動詞句の機能投射の違いと削除に課せられる意味的・統語的同一性の観点から分析できることを示した。帰結として、非特定の目的語交替を示す動詞 eat の2つの交替形には同一の機能投射が関与していること、また位置変化動詞 move や心理動詞 worry の使役形の構造は、自動詞形の構造を内部に含んでいることが支持された。この研究成果は、日本英文学会中部支部第71回大会において研究発表を行い、論文「On the coordination of Unlikes」として発表した。

第2の研究成果

使役及び経験の have の統語構造について調査した。特に「have+目的語+原形不定詞」の形式をとる下記(1)の構文について検討した。

- (1) a. The therapist had the patient walk to the park. (causative reading)
 b. John had someone steal his wallet. (experiencer reading)

この構文に關与する語彙的 have は1つであり、使役や経験の意味的相違は統語派生の中でそれぞれ異なる種類の機能範疇が併合されることによって生じることを明らかにした。この提案が、主語の解釈(使役者&受益者 v.s. 被害者)や記述される事象性の解釈(事象解釈 v.s. 状態解釈)の違いをとらえるとともに、**統語的にも動詞句削除の観点から異なる種類の機能投射を持つこと**が支持されることを示した。また特に使役の have 構文については、先行研究では指摘されてこなかった、**ApplBENE 主要部が関与し**、主語に受益者の意味役割が付与されることを明らかにした。この証拠として、二重目的語構文の受益者項で観察される有生制約が使役の have の主語にも観察されることを示した。また分析の帰結として、使役の have に後続する名詞句は have の項ではないことを使役の make 構文との対比によって示した。またもう1つの帰結として、使役及び経験の have の補文の主語が主節に移動している可能性を指摘し、これが照応表現の逆行束縛のデータによって支持されることを示した。この研究成果は、論文「使役及び経験の Have の統語構造」として発表した。

第3の研究成果

移動様態動詞(e.g. float, roll, bounce)の統語構造について調査した。特に動詞句削除や擬似空所化、do so 代用などのテストを用いて、この動詞類が非対格動詞として用いられる場合(1a)の動詞句構造と非能格動詞として用いられる場合(1b)の動詞句構造を比較調査した。

- (1) a. The boat floated into the cave.
 b. The boy floated (in place).

主要なテスト結果として、(1a)(1b)の異なる項交替間の動詞句削除は、非対格形を先行詞にして、非能格形を削除する場合は許されるが、逆の場合、つまり非能格形を先行詞にして、非対格形を削除する場合は許されないことがわかった。この結果から、非対格形の構造は、非能格形の構造を内部に含んでいることが支持された。またこの構造が正しい限りにおいて、**do フレイバーの軽動詞と become フレイバーの軽動詞を想定する必要性がある**ことが示唆された。この研究成果については現在日本英語学会の研究発表に応募中であり、まだ発表に至ってはいない。

以上が主要な研究結果であるが、第3の研究成果については、現在分析の精度を上げるためさらに使役形のデータを加えて調査をし、移動様態動詞の3つの交替形がどのような動詞句構造を持つのかを検討中である。また今後は Belletti (2017)の研究などを参考にして、今回の研究成果で必要性があったとした軽動詞が Chomsky (2013)で提案されるラベル付けアルゴリズムの要請から派生的に得られる可能性はないのか探求していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 梶本顕士	4. 巻 -
2. 論文標題 使役及び経験のHaveの統語構造	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ことばの様相 現在と未来をつなぐ	6. 最初と最後の頁 260-271
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梶本顕士（北海道教育大学）・中村太一（福井大学）	4. 巻 -
2. 論文標題 動詞句内要素の等位接続について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本英文学会2019年度中部支部第71回大会プロシーディングス	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Taichi Nakamura and Kenji Sugimoto	4. 巻 37
2. 論文標題 On the Coordination of Unlikes	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Explorations in English Linguistics	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 梶本顕士（北海道教育大学）・中村太一（福井大学）	
2. 発表標題 動詞句内要素の等位接続について	
3. 学会等名 日本英文学会中部支部第 71 回大会	
4. 発表年 2019年	

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中村 太一 (Nakamura Taichi)		
研究協力者	カネフラー クリストファー (Knoepfler Christopher)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------